様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２７１５

研究課題名（和文）クメール語の複数動詞文における動詞の下位分類に関する記述的研究

研究課題名（英文）A Descriptive Study of Serial Verb Constructions in Khmer

研究代表者
上田　広美（Ueda, Hiromi）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：６０２９２９９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代クメール（カンボジア）語において、接続詞の介在なく複数の動詞が連続して一文中に現れる文を対象としたものである。このような複数動詞文について、書記資料、口語資料の用例を収集し、どのような動詞が連続するのか、連続中の動詞の位置と共起制限についてを中心に分析を行った。また、国語研究を行うカンボジアの高等教育機関、および、用法が類似する複数動詞文を有するタイ語の研究者からも指導と助言を得ることで、言語教育への応用を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、現代クメール語の複数動詞文の中で主に移動と結果を表す動詞について記述したものである。本研究の成果は雑誌論文として発表された他、日常的に外国語としてのクメール語教育活動を行っている本研究代表者によって、一般向けのクメール語文法書及び語彙集作成のために活用されることで、社会・国民一般に対して広く還元される。また、本研究では、海外協力者として、カンボジア人研究者およびタイ人日本語研究者の協力を得たが、講演とワークショップを行うことで参加者に孤立語と日本語の対照に関する知見を示し、研究や言語教育の実践への応用が期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the serial verb constructions in the Khmer language, extracted from the corpora that include novels, essays and speeches. This study mainly investigated the collocation patterns of the verbs. In the research process, Cambodian and Thai researchers collaborated to provide advice on the corpora and on the method of analysis. The main result of this study was published in journal articles and also as learning materials for learners of Khmer as a foreign language.

研究分野：言語学

キーワード：クメール語　カンボジア語　動詞　複数動詞文

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）クメール（カンボジア）語は類型論的に孤立語に分類される。語形変化はなく、述語である動詞句を中心とする語順によって、文の意味が決定される。否定辞、連用詞などの助詞は実詞に前置される。実詞は、用いられる否定辞の種類を基準に、名詞類と動詞類に分類される。クメール語の動詞は形態上の特徴によって分類することができないため、本研究では、否定辞/mɯn/を直接前置できる語を動詞と考えることとした（Huffman1967）。動詞は、接続詞の介在なく連続して一文中に現れる。このようなクメール語の複数動詞文について、本研究は統語的観点から調査と研究を行った。

（２）前述のように、クメール語の一文中には、複数の動詞（句）が、その間の関係を明示する標識を介在させることなく連続して配列される。例えば、二つの動詞句が連続する[V1+V2]は、同じ動作主（経験主）の連続した動作（状態）を示すこともあるが、第２動詞[V2]の意味上の主語が異なることもある。

　こういったクメール語の複数動詞文については、先行研究中で、その動詞が表す動作が動作者の意思によって制御可能なものか否かという随意性を基準として分類されることが多かった。一方で、このような動詞の随意性による分類で同型に分類された複数動詞文について、異なる解釈が可能であることも指摘されていた。本研究代表者は、先行研究と同じく動詞の随意性を基準として用いながら、動詞の種類だけでは第２動詞の動作者を特定できないこと、随意動詞の連続中の動詞の配列順が修飾関係によって決定することを考察してきた(上田･岡田 2017)。

２．研究の目的

（１）本研究においては、過去の研究で蓄積した口語、文語の現代クメール語資料をもとに多数の複数動詞文の用例を収集し、動詞の下位分類の基準を検討する一助として、接続詞や否定辞の介在可能性、動詞の配列順の入れ替え可能性、動詞の共起制限を調査することを目的とした。

（２）また、本研究で対象とする複数動詞文の用法は、外国語としてのクメール語教育において、学習者の誤用が数多く観察される課題でもあることから、本課題の成果を、クメール語文法研究の分野にとどまらず、言語教育に応用することを目指した。

３．研究の方法

（１）本研究は、まず現代クメール語資料から複数動詞文を含む用例を収集し、連続する動詞の種類と出現頻度およびその環境を調査した。主に以下の３種類を利用した。

①調査協力者による記録（随筆、自伝）

②調査協力者による口語資料

③現代文学作品（小説、戯曲、ノンフィクション）

　また、クメール語は固有の文字を用いることから検索利用に制限があるものの、上述の資料のうち①の資料については、本研究期間の期間中に、調査協力者（著作者）の了解のもとに、クメール語と日本語の対訳をもつ検索可能なコーパスの作成を試みた。

（２）資料の選定にあたっては、クメール語資料の収集及び用例の分析に関して、外国語としてのクメール語教育の経験をもつカンボジア人海外研究者２名の協力を得た。また、分析の手法に関して、系統は異なるものの類型的にはクメール語と同じく孤立語であるタイ語の母語話者であるタイ人日本語研究者２名から､外国語教授法への応用の観点からの指導と助言を得た。

　さらに、研究期間中、海外共同研究者を研究拠点に招へいし、①日本語との対照研究の観点からの講演会、②孤立語話者のための日本語教育への応用の観点からのワークショップを行った。

（３）研究期間中に扱う用例としては、対となって用いられることの多い一群の動詞から、移動を表すもの、結果を表すものを対象とした。

４．研究成果

（１）主な成果としては、研究期間の１年目に移動を表す動詞の連続に関する論文を、また、研究期間の３年目に視覚と聴覚にかかわる動詞の連続に関する論文を執筆した。前者では、移動を表す動詞のうち、３対の動詞/coh/〈下がる〉、/laəŋ/〈上がる〉、/ceɲ/〈出る〉、/cool/〈入る〉、/tàv/〈行く〉、/mɔ̀ɔk/〈来る〉を対象とし、物理的な移動を表す用例を分析した。そして、この一群の動詞の出現環境を整理し、出現の有無は文体の差によるものなのか、先行研究の記述に沿わない配列順の連続はどのような意味を持つのかを検討することで、動詞句の連続全体の中での移動動詞の位置付けを試みた。後者では、収集したクメール語資料から、[V1＋V2] という２つの動詞句の連続を対象とし、過去の研究（上田・岡田 2017）をもとに、[V1] と [V2] の意味的な関係を、並列、結果、目的、様態に分類したうち、[V2] が [V1] の結果を表す連続を中心に研究成果をまとめた。発表論文以外に、研究期間中に発表した翻訳書、および、研究期間終了後に発表した外国語学習者のための語彙集にも、本研究で得られた動詞の分類に関する知見を活用した。

　主な研究目的である、複数動詞文における動詞の分類についての研究成果の詳細を以下に記す。

（２）移動を表す動詞に関しては、動詞連続中での用法を中心に検討した。まず、個々の動詞

の出現環境について整理した。物理的な移動を表す場合の動詞の組み合わせについて、移動動詞が２つ連続する場合、下記の表１のような用例が見つかった（上田 2018)。

表１：移動動詞の組み合わせ

	/coh/ 下への移動	**/laəŋ/** 上への移動	**/ceɲ/** 離反	**/cool/** 接近	**/tə̀v/** 発話地点以外への移動	**/mə̀ɔk/** 話地点を着点とする移動
/coh/		有	有		有	有
/laəŋ/					有	有
/ceɲ/				有	有	有
/cool/					有	有
/tə̀v/						有
/mə̀ɔk/						

次に､収集した資料から移動動詞の用例を収集し検討した結果､以下の点が明らかになった。

・対となる動詞を並べる場合の語順は基本的に決まっており、逆の語順は好まれない。

・移動動詞が他の動詞に前置される場合には、後続する動詞は移動の目的を表す。

・移動動詞が他の動詞に後続する場合には､「歩く」､「走る」など移動の様態を表す動詞が先行することが多い。移動動詞を付加することで、移動という動作の進行と、その方向が明示される。

・移動動詞が他の動詞に後続する場合に、移動動詞が否定できる文もあり、その場合は、先行する動詞の結果を表す連続である。

・移動動詞が連続する場合の語順は、固定されていることが多い。しかし、他の動詞が、移動を表す動詞の間に入ることもある。その場合、動詞句は修飾関係にあると考えられる。

・移動動詞に先行する動詞[V1]の意味により、移動動詞がとることのできる補語が異なる。

（３）視覚と聴覚にかかわる動詞の連続については、先行研究中では､[V1＋V2] という２つの動詞句の連続で [V2] が [V1] の結果を表す場合には、結果構文として記述され､[V2] の位置に現れる一群の動詞の中に、特定の [V1] と対をなすものがあること、否定辞は [V2] に前置される､という２点が指摘されてきた。それに加え､[V2] の位置にあれば結果を表す動詞/lɯɯ/＜聞こえる＞が､[V1] の位置にあれば動作の試行を表す例も挙げている研究もあった (Haiman 2011)。

まず、先行研究で挙げられている、結果を表す動詞の種類とその対となる動詞を対照した。また、同じ動詞が連続中の出現位置によって異なる役割を果たすという先行研究の主張について根拠となる例文を検討した。次に、そのような一群の動詞のうち、比較的頻度の高い視覚と聴覚にかかわる２語、すなわち、/khə̀əɲ/＜見える＞と/lɯɯ/＜聞こえる＞の用例を収集し、出現環境を整理した。

結果を表す動詞の中で、対をなすとされている動詞として挙げられている一群の動詞についての整理である。先行研究中では、動作を表す動詞 [V1] と結果を表す動詞 [V2] の組み合わせについて、概ね同じ動詞を、結果を表す動詞として、挙げていた。また、大部分の先行研究では､①特定の [V1] と対になるもの､② [V1] としてさまざまな動詞が現れる一般的なもの、という２つのグループに分類していた。次の表２は、上田 (2020) からの抜粋で、対となって用いられる主な動詞の組み合わせを挙げたものである。Khin (1999) と Jacob(1968)と Huffman(1967)については､①特定の [V1] と対になるもの､② [V1] としてさまざまな動詞が現れるもの､という２つのグループのいずれに分類されたのか､表中に数字で示した｡上田(2020)では、18 の動詞を扱ったが、本報告書では、用例の少ない動詞を一部割愛した。また、出現する位置によって同じ動詞が動作の試行を表す場合と結果を表す場合があるという指摘 (Haiman2011, 2019)については、根拠となる例文について確認ができなかった。

表２：結果を表す動詞が [V2] にある例文中の [V1] (先行研究の対照)

[V2]	Khin (1999)	Jacob(1968)	Huffman(1967)	Haiman (2011,2019)	Bisang(2014)
khə̀əɲ 見える	① rə̀ɔk 探す kɯt 考える	① rə̀ɔk 探す kɯt 考える nɯk 思う	① rə̀ɔk 探す kɯt 考える nɯk 思う	rə̀ɔk 探す	rə̀ɔk 探す nɯk 思う

	màəl 見る	màəl 見る	màəl 見る	màəl 見る	
cɛh 知る	① riən 学ぶ	① riən 学ぶ	① riən 学ぶ		riən 学ぶ
lɯɯ 聞こえる	① sdap 聞く	① sdap 聞く	① sdap 聞く	sdap 聞く	sdap 聞く
lɔ̀k 眠る	① deek 寝る		① deek 寝る	deek 寝る	
kaət 生じる	② niijèəj 話す daə 歩く	② tvəə kaa 働く	② mɔ̀ɔk 来る	hoop 食べる clɔ̀h 争う	
dɔl 至る	② daə 歩く kɯt 考える			dɔɔk dəŋhaəm 呼吸する smaan 推測する	
trəv 当たる	② baɲ 撃つ	① smaan 推測する		smaan 推測する thaa 言う	smaan 推測する kɯt 考える
tɔən 間に合う	② kɯt 考える təv 行く		① təv 行く	kèc 避ける coh 降りる	deɲ 追う
baan 得る	② təv 行く praə 使う	② təv 行く	② təv 行く	trəəm 耐える	
ruoc 逃げる	② lə̀ək 持ち上げる rɔ̀t 逃げる	② təv 行く tvəə kaa 働く	② lə̀ək 持ち上げる màəl 見る	lə̀ək 持ち上げる rɛ̀ɛk 担ぐ dɔɔk dəŋhaəm 呼吸する	
phot 超える		① ciəh 避ける	① ciəh 避ける	kèc 避ける	
khoh 間違う		① kɯt 考える			kɯt 考える smaan 推測する

次に、表２で示した一群の動詞のうち、比較的頻度の高い視覚と聴覚にかかわる２語、すなわち、/khəəɲ/＜見える＞と/lɯɯ/＜聞こえる＞の用例を収集し、この２語がどのように用いられているのか、出現環境を整理した。その結果明らかになったのは、以下の２点である。

・この２語が［V2］の位置にある連続では、/khəəɲ/＜見える＞については、動作の主体は［V1］と［V2］で共有されるが、/lɯɯ/＜聞こえる＞については共有されない例が多い。

・/lɯɯ/＜聞こえる＞の用例では、動作主体を共有しない場合、/lɯɯ/＜聞こえる＞の後に、どのように聞こえているかを表す何らかの修飾語句を付けたり/lɯɯ/＜聞こえる＞を重複させる

か、もしくは否定辞を用いて、「聞こえていない」ことを表す必要があった。
（４）本研究の成果を外国語としてのクメール語教育に応用すべく、研究期間を通じて、外国語としてのクメール語教育に活用できる語彙集を編纂し、研究期間終了後（令和２年度）に出版した。本研究は、クメール語文法を記述するものであるが、本研究代表者及び海外協力者は日常的に高等教育機関で外国語教育を行っているため、日本におけるクメール語教育、またカンボジアにおける外国語としてのクメール語教育において、社会に還元されると期待される。また、本研究では、海外協力者として、カンボジア人研究者およびタイ人日本語研究者の協力を得たが、講演とワークショップを行うことで参加者に孤立語と日本語の対照に関する知見を与え、研究や言語教育の実践への応用が期待できる。
　さらに、研究のために収集された用例や構築された簡易コーパスは、今後もクメール語研究に利用可能である。今後の展望としては、本研究では、二つの動詞の連続［V1＋V2］について主に［V2］の位置にある動詞に着目して調査したが、収集した用例中には、/sɔmlap mɯn slap/＜殺す＋否定辞＋死ぬ：殺したが死ななかった＞という連続もあったため、今後は、［V1］の位置に現れる動詞の意味について、結果が含意されるのかどうかの検討が必要となると考えられる。

＜引用文献＞

① 上田広美、岡田知子、クメール語の動詞句の連続について、東南アジア大陸部諸言語の動詞連続、2017、36-71

② Bisang , Walter.(2014) ″ Modern Khmer″, *The Handbook of Austroasiatic languages (Grammars and Sketches of the World's Languages: Mainland and Insular South East Asia)*; pp. 677-716, edited by Mathias Jenny / Paul Sidwell, Brill Academic Pub; Lam.

③ Haiman, John. (2011) *Cambodian Khmer*. London: John Benjamins.

④ Haiman, John. (2019) ″Khmer″, *The Mainland Southeast Asia Linguistic Area (Trends in Linguistics. Studies and Monographs)*; pp. 320-383, edited by Alice Vittrant / Justin Watkins, Mouton De Gruyter.

⑤ Huffman, Franklin Eugene. (1967) *An outline of cambodian grammer*. Ann Arbor:University Microfilms.

⑥ Jacob, Judith M. (1968) *Introduction to cambodian*. London:Oxford University Press.

⑦ Khin, Sok (1999) *La grammaire du khmer moderne*. Paris:Éditions You-Feng.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 上田広美	４．巻 49
２．論文標題 クメール語の移動動詞に関する一考察	５．発行年 2018年
３．雑誌名 慶應義塾大学言語文化研究所紀要	６．最初と最後の頁 109--128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上田広美	４．巻 51
２．論文標題 クメール語の結果を表す動詞に関する一考察	５．発行年 2020年
３．雑誌名 慶應義塾大学言語文化研究所紀要	６．最初と最後の頁 149-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計4件

１．著者名 Ａシルベストル著、坂本恭章訳、上田広美・岡田知子編	４．発行年 2019年
２．出版社 めこん	５．総ページ数 303
３．書名 カンボジアの行政	

１．著者名 坂本恭章・岡田知子訳、上田広美編	４．発行年 2019年
２．出版社 めこん	５．総ページ数 890
３．書名 ナガラワッタ	

１．著者名 上田　広美	４．発行年 2017年
２．出版社 白水社	５．総ページ数 166
３．書名 カンボジア語　読解と練習《CD付》	

１．著者名 川村よし子、上田広美、三修社編集部	４．発行年 2020年
２．出版社 三修社	５．総ページ数 960
３．書名 ポータブル日カンボジア英・カンボジア日英辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考